

ボルソナーロ大統領の新型コロナ対応を探る

高元 次郎

はじめに

ブラジル好きの間ではブラジルの多様性を表す表現として「Brasil nao e para principiantes (ブラジルは初心者向けではない)」というボサノバで有名な音楽家トム・ジョビンの言葉が使われる。ブラジルのコロナ対応を分析するに当たってもまずこの言葉を紹介したい。ブラジルは2億超の人口を誇り、その約4割が非正規経済活動人口であり定期的な収入を得ていないが、それでもGDP(国内総生産)で見れば世界第9位の経済大国である。広大な国土(日本の23倍)の49%がアマゾン地域であるが、南米最大都市サンパウロのパウリスタ通りにはスターバックスを片手にスーツに身を包んだビジネスマンが颯爽と歩いている。地域間の文化や州民性も全く異なる。ブラジルを十把一絡げで語ることは難しい。

感染経路

2月26日、サンパウロで国内初めての新型コロナウイルス(COVID-19)感染者が確認された。61歳の男性はその数日前までイタリアに出張していたという。南米としても初めての感染者確認である。サンパウロ以外にもブラジルでは当初はリオやブラジリア、マナウスの大都市を中心に欧米からの帰国者

による輸入症例が目立っていた。3月12日にはトランプ大統領との米ブラジル首脳会談に同席したブラジル政府高官の感染が発表された。北部・北東部でも感染者が広がったが、やはり感染が一番多いのはサンパウロ州で21.9万人(6月21日現在)全体の22%を超えている。

拡大の趨勢、感染者並びに死者数

コロナ感染状況が拡大し始めた4月以降、国内の政治的混乱が目立つようになる。経済優先を掲げるボルソナーロ大統領は4月16日にはコロナ対策を巡って意見が対立していたマンデッタ保健大臣を解任し、その直後の4月24日にはボルソナーロ政権きつてのスーパー大臣と言われたモロ法務・治安大臣が大統領の警察人事への政治的介入を理由に辞任した。一方、コロナ感染者は4月に入ってからも増加し、4月30日には累積感染者数が中国を超えて87,000人に達する。5月に入ると増加はさらに進み、5月11日には20万人を突破と、わずか11日間で倍増となった。5月31日には50万人を突破し、6月に入ると最初の3週間で100万人を突破している。この間、5月15日には就任して間もないタイシ保健大臣も辞任している。死者数も6月21日には5万人を突破している。

図：ブラジルにおける新型コロナウイルス感染確認症例(6月12日時点)



出所：ブラジル保健省HPを基に執筆で作成

感染拡大阻止のために採られた施策とのその理由・背景

ボルソナーロ大統領は、大統領候補として注目されるようになった2018年以降、一貫してメディアに対して敵対的姿勢を明確にし(それが彼の政治戦術の一つでもある)、また、ブラジル主要メディアも反ボルソナーロであり、19年1月の大統領就任後も、また、コロナ発生以降もお互いその態度を譲っていない。実際、メディアの挑発を全面に受けるが如く、ボルソナーロ大統領は「(コロナウイルスを)元軍人でアスリートの自分は何ら恐れていない」「ただの風邪みたいなものだ」「(死者が増え続けているが)俺に何をしろというのか」と自由奔放な発言を繰り返し、国際メディアもブラジル国内メディアの報道を

受け、ボルソナーロ大統領のそうした発言の揚げ足を取って一斉に批判した。

ただし、ブラジルでコロナ感染が拡大したことをボルソナーロ大統領一人の責任に押し付けることはできない。コロナが悪化の一途を辿る最中の4月15日、ブラジル最高裁は、コロナ対策に関する措置の最終決定権は地方政府にあるとの判決を出した。大統領のそうした発言は市民を扇動したものの（これが結果的に大統領の支持基盤をより強固なものとした）、各自治体の現場では極めて冷静な措置が執られた。特に感染者数が急激に拡大したサンパウロ州では3月24日から同州全域で社会隔離措置を実施し、生活に不可欠なサービス以外の全ての施設を強制的に閉鎖し、ドリャ同州知事は「違反者は州軍警察に逮捕され得る」とまで呼びかけた。その他の州でも同様に社会隔離措置が取られていた。すなわち、ボルソナーロ大統領は様々な発言を繰り返すも、ブラジル全体としてみれば、然るべき社会隔離措置が取られ、一定の成果を生み出していた。サンパウロ大都市圏内の公立病院のICU（集中治療室）占有率は5月上旬は90%前後で推移していたが、6月21日には60%台まで下がっている。

さらに結果論になるが、ボルソナーロ大統領の反社会隔離措置が完全に間違いであったと言い切る材料もない。厳格なロックダウン措置を当初から導入したペルーも結局はコロナの感染拡大を防ぐことができなかった。6月15日付のファイナンシャル・タイムズ紙は、「ペルーといった南米諸国はフランスやドイツと異なり、（公的扶助を受けられない）非正規経済活動人口の割合が高く、ロックダウン措置が機能し難かった」と分析した記事を掲載している。ボルソナーロ大統領も繰り返し「冷蔵庫が空っぽの市民は自宅に閉じこもっているわけにはいかない」と述べている。ボルソナーロ大統領の支持率は大きく落ち込むことなく3割前後を推移している。

今後の展望と課題

ブラジルのコロナ感染のピーク時期の予測は困難であるが、サンパウロ州では週毎の新規感染者数が6月第2週に入って初めて前週比で減少している。しかし、世界的に第2波の到来が予想される中、ブラジルで深刻な状況が続くことには変わりはない。ボルソナーロ大統領が打ち出した緊急経済対策は総額1兆リアル（約20兆円）を超える、GDPの19%

に相当する大規模で、弱者救済から企業融資まで含まれた大胆なパッケージであったが、ブラジル中央銀行は5月末時点で今年のGDP成長率をマイナス5.89%と予想しており、コロナと経済不況で二重の困難が予想される。そして本年後半には2022年大統領選挙に向けた中間評価ともいえる地方選挙が待ち構えている。

6月18日には教育大臣が辞任した。ボルソナーロ政権発足以降12人目となる閣僚の交代である。保健大臣ポストは依然として空席のまま。コロナ拡大の終息の目途はつかず、様々なデータで「記録更新」が日々報じられている。それでも待ち構えるメディアに対して何一つ変わらぬ表情で自由奔放な発言を繰り返す大統領の姿勢は一貫している。「初心者向けの国でない国」を率いる難しさは「初心者」には理解できないのかもしれない。

（本稿は、2020年6月21日時点での収集データ・資料に拠っている。また本稿は、執筆者個人の見解であって、所属先の見方を述べたものではない。）

（たかもとじろう 外務省中南米局南米課課長補佐・ブラジル班長）

